

3. 寄稿：専門性という楔（くさび）

（学校法人星槎こども園 KIDS planet 理事/コモンズ・ラフト(株)代表 井上 一）

「数学や理科など何のために勉強するの？」 あなたならこどもからの質問にどう答えますか？ 私は仕事柄、このような場面で大人があまり説得力のない答えをしているのを目にすることが多くあります。「社会に出ると数学的感覚で捉える必要があることに出くわすから学んだよ」「理科の基礎がないと大人になって困るよ」など、おそらく答えている側も腹落ちしない気持ち悪さを持っているのだろうなと思いつつ聞いています。

そもそも、英語・数学・国語・社会・理科という科目はいつ定められたのか、誰が定めたのか、なぜ定めたのかなどが曖昧な中でこのこどもの問いに答えることはなかなか難しいでしょう。しかし、少なくとも私たちの多くはこれらの科目は誰かが仮に定めたもの、誤解を恐れずにいえば作られたもの（フィクション）であるということを認識できなくなっています。

私たちは自分たちが所属する世界に順応する能力を持ちます。しかし、その順応性ゆえにその所属する世界のもつ「異常性」に気が付かないことがあります。当たり前になっていることも、実は少し俯瞰的に眺めてみるとおかしなことだなと気付くことはありませんか？

例えば、学校。日本の中学校、高校では制服を着用することが多いです。しかし、全員が同じ服を着る場面は社会ではあまりありません。髪型やスカートの丈などの校則と呼ばれるルールも一般社会に当てはめてみると異常なことが少なくありません。教科・科目も同様です。英語・数学・国語・社会・理科など、こどもたちは勉強といえばこれらの科目を学ぶことと理解していますが、一般社会にこれらの科目が独立して存在することはありません。また、一生を左右する可能性がある試験も、限られた時間内でより多くの正解を出した者がよいという判断で行われます。しかし、一旦社会に出ると正解のない問いに囲まれます。

私たちが当たり前と認識している学校は、このように一般社会の様相とは一線を画した世界となっていて、こどもたちは校則や試験に代表される特別な決まりごとの中で「失敗をしてはいけない」と日々せつかれて成長していきます。

この手法がダメだと言っているわけではありません。この方法がしっくりときて、豊かに成長していくこどもたちも多くなります。しかし、この方法が合わなかったときにあまりに選択肢がないのが、日本の教育であると思います。

憲法にしても、教育基本法にしても、国は国民に対してその人の状況に応じて教育を提供することを謳い、国民が



基本的人権の一つである学習権を全うできるように定めてあるにもかかわらず、失敗をしてはいけない、選択肢はないという状況の中で苦しんでいることもたちが少なくないということに、教育の関係者だけではなく全ての人間が注意を払っていくことが必要だと思っています。

しかし、前述のように私たちは自らが存在する世界における「異常性」を見失いがちです。このことを前提におきながら「専門性」について考えてみます。

私は自分の仕事として学び難さをもつ方たちのための学校づくりを仲間たちと取り組んできました。役職としては校長や学長、学校法人理事長なども経験しました。大学の学長としては多くの専門的優秀さを兼ね備えた教員に囲まれて楽しく仕事をいたしました。しかし併せて常に彼ら彼女らに問いかけていました。それは「専門性」とは何ですか？ということでした。

私が若いときに取得した中小企業診断士という資格しかり、弁護士、税理士、社会保険労務士などの専門職も大学の教授や学校教員と同じく専門家にあたります。まず私たちの仕事の第一番地はクライアントのニーズを満たすということです。

しかし、専門性とは何かという問いに立ち戻るとすれば、クライアントのニーズを満たすというだけで良いのかという疑問が湧いてきます。私は「専門性は私たちが生きるこの社会をより良いものとするという大きなテーマに対して打ち込むことで価値を生む楔（くさび）だ」と認識しています。

この発想に立てば、専門職は目の前のクライアントをサポートすることにより、そのクライアントを通じて社会の向上に資する存在であると捉えることで、より広いフィールドで自らの仕事を認識し直すことができるのではないかと考えます。この視点を失ったとき、私たちは自分たちで閉じてしまっている世界に潜む「異常性」を見過ごすのかもしれない。



専門性を追求するということは大変尊い営みです。しかし同時にその切れ味が鋭ければ鋭いほど、もしかしたら自ら立つ世界を自分は閉じてしまっているのかもしれない、自分が見る景色の「異常性」に気付かなくなっているのかもしれないという内省的矜持を持つ必要性が高まります。特に効率性、利便性、経済性などの圧力が強く働く領域では、俯瞰して振り返ることを許されない場合があります。

ですから尚更のこと、より大きな社会的課題に対していかに専門性という楔を打ち込むべきかを胸におきながら、目の前のクライアントのニーズに応えつつ、同時にその先の社会的向上を目指すということを忘れずにいることが必要ではないかと考えます。